

ツールを活用した自己理解と進学先への移行について

—「サポートブック」の作成と活用—

愛知県立名古屋聾学校

1 はじめに

名古屋聾学校は、聴覚障害の生徒が通う学校であり、今年で創立124年を迎えた歴史と伝統のある学校である。中学部・高等部本科・高等部専攻科が設置されており、高等部より4学科（普通科、生活デザイン科、インテリア科、機械制御科）に分かれて学習を行っている。専門学科が設置されているのは県内では本校のみであり、本校の特徴として、社会自立を目指し、基礎学力の向上と職業教育に力を注いでいる。高等部は本科、専攻科に分かれ、専攻科では専門学科で2年間学ぶことができる。そのため、県内外から多くの生徒が通う、聾学校の中では比較的規模が大きい学校である。

本校の進路状況の特徴は、高等部本科生については、本校専攻科や大学等への進学者が約6割と多く、そのうち大学への進学者は約4割である。一方、高等部専攻科の進路状況は、一般企業等への就職者が約9割を占め、専門学校や障害者職業能力開発校への進学者は約1割である。

本研究における本校の課題は、援助要請の経験値の少なさ、生徒自身の「聞こえ」に関する理解の不足、の2点が考えられる。校内においては手話や字幕など情報保障が充実しており、援助要請を必要とする機会が少ない。また、産業現場等における実習など、学校を離れて学ぶ機会は高等部進学生徒では五日間しかなく、情報保障が得られにくい環境下における困難さについて、実際に経験できる機会も多くない。そのため、どのような場面で、どういった支援を求める必要があるのかなど、詳細な理解が不足している生徒が多い。それに対し、本校の強みは、少人数指導、強みを生かせる多様な学科があること、豊富な進学・就職実績があることの3点がある。本研究では、これらの強みを生かし、課題に対するアプローチを行った。

2 実践研究内容

(1) 研究の概要

本研究では、資料1の支援スケジュールに基づいて実践を行った。対象生徒は、高等部本科1年生から3年生までの大学進学希望生徒各学年2名ずつとした。それぞれ、自己理解、主体的な進路選択、卒業後の進路先への移行、の三つの取組について、担任を中心に自立活動や特別活動の時間で実践を行った。

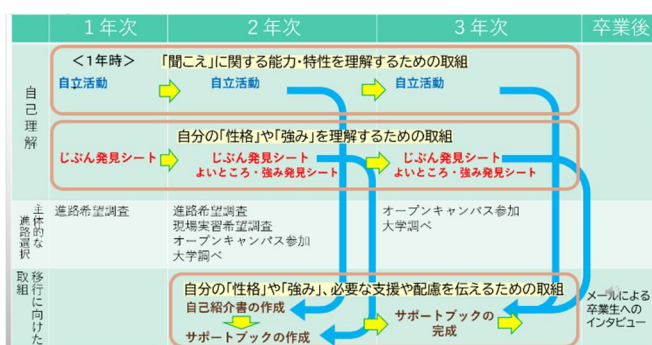
本研究の特徴として、自己理解に関する取組から、進路選択や移行に向けた取組につなげていく点と、自己理解に関する取組を複数回行うことにより、継続的に自己理解について深めていくことをねらいとしている点である。卒業生については、大学での生活について、交友関係や授業時の配慮などを中心に、メールや対面での追調査を実施した。

(2) 三つの取組について

ア 自己理解を深める取組

(ア) 「聞こえ」に関する能力・特性を理解するための取組

【資料1 支援スケジュール】



【資料2 自立活動授業プリント】

本校では、自立活動の時間の指導において、「聞こえ」に関する内容を取り扱っている。自身の障害についての正確な理解や、補聴機器のメンテナンス方法、支援が必要な場面と対処法について理解することをねらいとしている。そのため、聴力検査や発音チェック等を行うほか、聴覚障害に起因する困難さや、社会に出たときに必要な配慮とは何であるかについて知ることで、自分にとって望ましい配慮を理解する取組を行っている。本研究においては、自分の聞こえ方について知り、場面ごとに必要な配慮を考える取組を行っ

た。自分の聞こえについて考える取組では、相手の会話内容が聞き取れなかったときの現在の対応と、今後やっていきたい対応について考えた（資料2）。生徒によっては、聞き直すことにストレスを感じており、分からなかったら諦める対応をしていることが記述からうかがえた。しかしながら、今後やっていきたい対応では、「メモを常備する」「できる限り自分で何とか分かるようにしたい」との記述が見られ、自分の聞こえの特徴に向き合い、対処法について具体的に検討することができた。

（イ）自分の「性格」や「特性」を理解するための取組

全学年で、自分の性格や特性を理解するための取組として、「じぶん発見シート」を9月、1月、6月の計3回実施した。「じぶん発見シート」を用いて自分の性格や特性について深く考え、自分の特性について知ること、特性に応じた進路選択を考えたり、自分の特性について他者に説明したりする取組につなげていくことがねらいである。研究対象生徒については、3回目の実施後、自分の変容について担任と一緒に振り返る時間を設けるなど、自己理解につなげられるようにした。また、担任も同項目で生徒を評価した。一部の生徒については、回数を重ねるにつれ、自己理解が変容している様子がシートより確認できた。各項目に自分が当てはまるかどうか考え、エピソードを記入するシート構成になっているため、生徒がシートに記入する際、自分のことについて深く、真剣に考えている様子が見られた（次ページ資料3）。生徒の感想には、「自分の特徴を知ること、深い自己理解を促進できた」との記述があった（次ページ資料4）。また、シートに取り組んだり、振り返ったりする時間を確保することにより、自分自身の進路について見つめ直し、主体的に進学先の再検討を行う生徒もいた。担任の感想からは、「じぶん発見シート」は、生徒の自己理解の捉え方を把握できるため、実態把握の手法として有用であるという意見があった。

- 4 あなたは、話している相手の内容を聞き取ることができなかったとき、どのように対応していますか？
「あなたがやっていること」、「今後やっていくこと」を書いてみましょう。

聞こえていないこと
 ・「何？何て言ってるの？」と1日に何回か繰り返してる。苦痛。～
 ・急外ストレス。
 諦める
 ・分からなかったら、諦める。→他のことを考えたり、紙を挿入したり。
 今後やっていくこと
 ・出来る限り、自分の力でなんとか分かるようにしたい。
 ・メモ常備
 ・どこかで諦めることも大層。
 ・無表情で話を聞く。
 何？って聞いても分からなかったら、

- 5 友達や先生の話が分からなくて困ったときに「今、なんて言ったのか教えて」と言うのはすごく勇気があることです。しかし、だまっていたら困っていることにだれも気が付きません。あなたはこれからどんなことに気をつけていきますか？

タイミングを見て、自分の心を守りながら「何??」を言います。
 言いたいので。

【資料3 じぶん発見シート】

一人でいることが好き	○	誰にも気を遣わずに自分のペースで行動できるから。
人と話す(関わる)ことが好き		
将来の夢(やりたい/やってみたいこと)がある		
興味(熱中できるもの)がある	○	ガチャガチャや読書、ドラマ
好きなもの(こと)がある	○	
運動が好き		
ものづくりが好き		
手先が器用である	○	
想像(目に見えないものを思い浮かべる)力がある	○	小説を読む時人物の顔や声を想像しているから。
細かな情報による記憶が得意		

【資料4 じぶん発見シートの振り返り】

1 「じぶん発見シート」の結果が違うのはなぜか、思いついたことを書いてみよう。最初書いたときよりもさまざまな系馬交配フタ、出来事を体験したから。

2 「じぶん」発見シートを行うことでプラスになったことはなにか、思いついたことを書いてみよう。
自分の特徴を矢口ることによりよい、深い自己理解を促進できたこと。

(ウ) 自分の「強み」を理解するための取組

自分の強みを理解するため、行事に合わせ、「よいところ・強み発見シート」を活用した。シートの活用を通し、自分が現在認識している「よいところ」と、自分が新たに発見できた「よいところ」を把握し、自分の「強み」として再認識することで、(イ)と同様に進路選択や自分の強みについて他者に説明する取組につなげていくことがねらいである。行事前の生徒たちの記述内容からは、「自分の考えをみんなに伝えることを目標としたい」「自分のことを第一に、第二に困っている人を助けたい」など、明確な目標を立てて行事に臨んだ様子が見られた(資料5)。また、行事後の評価では、「一緒に作ってほしいとお願いすることができた」「文化祭の準備作業のときに、目標を達成することができた」など、目標に対する自分の行動について、前向きな評価を行えた記述が見られた。このことから、「よいところ・強み発見シート」を活用することで、①生徒が各行事への参加に対して明確な目的をもてること、②行事参加時に目的を意識して行動できること、③行事後に自分の行動を振り返り、自分の強みを発見できること、の3点が期待できることとして推察できた。

【資料5 よいところ・強み発見シート】

いいところリスト	活動前	活動後
①自分にあったスピード(ペース)で取り組むことができる。	○	◎
②質にこだわって取り組むことができる。		◎
③スピードと質のバランスを意識して取り組むことができる。		
④他者の意見や状況に応じて、考え方ややり方を修正しながら取り組むことができる。	○	△
⑤指示された内容を自分なりに工夫して覚えたり、理解したりすることができる。	○	◎
⑥指示されたことを一つずつ、手順や段取りに従って的確に取り組むことができる。	○	◎
⑦指示された複数のことを、手順や優先順位を決めて取り組むことができる。		
⑧うまくいかないときや混乱したときに、気持ちを落ち着けて取り組むことができる。	○	△
⑨困ったときに、誰かに相談したり助けを求めたりして取り組むことができる。		
⑩誰かが困っているときに、声をかけたり助けをしたりすることができる。	○	◎
⑪相手の状況や立場の違いに応じた発言や応対ができる。		
⑫割り当てられた自分の役割以外にも、積極的に取り組むことができる。		

★目標あなたは、この活動の中でどのような自分でありたいと思いますか。自由に書きましょう。

自分のプラスでの役割を再確認できる。
丁寧に、正確に、作業を行える
体調と安全に留意しながら作業できる
まず自分の事を第一に、第二に困っている人を助けること、
ができる。
上のよう、スッキリとできる自分でありたい。

イ 主体的な進路選択につなげる取組

自立活動やホームルーム活動の時間において、聞こえや自己理解に関する内容の他に、自分の進路に関する調べ学習を行った。また、高等部本科生徒全員を対象として、学科別に分かれた校外学習を実施し、自分が希望する進路先に近い学校や会社へ赴き、見学や体験を行った。校外学習など、体験的な学習を重ねることで、自分の希望する進路について具体的なイメージをもてるようになり、自分に合った進路選択を深く考えるきっかけとなった。

さらに、高等部2年では、9月に学校近隣事業所で現場実習を行った。これらの活動を通して自分の進路について考える経験を重ねた上で、進路希望調査を高等部1年は1月に1回、高等部2年は6・1月の2回実施した。実施方法は、生徒自身が希望の進路を記入し、保護者と内容を確認した上で提出することとした。進路希望調査後は、担任と相談しながら、各自の希望に基づいて今後の進路に向けての方針を確認する活動を行った。また、進路を検討する上で必要な情報を得るため、志望大学での受験方式の選定や大学で受けられる支援内容の確認などを個別に調べたり、オープンキャンパスに参加したり

して、情報収集を行った。

ウ 進路先への移行に向けた取組

(ア) 自己紹介書

高等部2年生では、「自己理解」を深めるとともに、自身の能力特性を表現する活動として、自己紹介書の作成に取り組んだ。毎年9月に行われる実習に向けて、性格・趣味、コミュニケーション、実習・作業、部活動や資格について自分で記入し、それを実習先に持参して説明する活動を行った。自分の性格や聞こえ方だけでなく、学習面、作業面など、自分では客観的に表現しにくい内容について考え、説明する活動を伴うため、教員が個別に自己紹介書の記述についてやり取りする中で、「じぶん発見シート」と同様に、自己理解を深める機会を確保できた。実際に会社で説明する際は、初めての経験で戸惑ったり緊張したりする生徒も多く見られたが、自己紹介書の内容に基づき、会社の担当者に丁寧に説明することができた。実習後は、自己紹介書を基に、「サポートブック」の作成に取り組んだ。

(イ) サポートブック

「サポートブック」は、もともと就職希望生徒向けに教員が作成していた。内容は、聴覚障害に関する概要とプロフィール表である。プロフィール表自体は大きく2点に分かれ、主に性格や、学習面、作業面の力など、自身の「強み」に関する内容と、聞こえや必要な配慮についてなどの「障害」に関する内容の2点が盛り込まれていた。本研究では、大学進学に沿った内容としてアレンジを加え、学習面、作業面についての項目を、それぞれ「興味・関心のあること」「自己アピール」の項目に変更し、生徒と担任が相談して記入するようにした。これまで、自己理解についての取組を通して深まった、自身の「強み」や「障害」について、自分の言葉でまとめることで、実際の支援を求めるための「自分のトリセツ」を作ることを目的とした。このような活動の結果、進学後に自ら支援を求める必要性についての理解が深まった。また、作成を通し、自分の特性や、自分の必要とする配慮について多面的に把握することができた結果、自分のことについて文章で表現する力が向上した。このことは、文章で伝えることに苦手意識がある生徒の多い聾学校にとって、大きな収穫となった。完成したサポートブックは、依頼のあった大学に実際に送付した。卒業生にメールでインタビューした結果、大学の配慮もあり、困ることなく大学生活を送れていることが確認できた。

(3) 校内支援体制づくり

本校では、研究に限らず、あらゆる場面で生徒についての情報共有を密に行う支援体制が構築されており、教科の部分や生活の部分も含め、全職員が関わっている。本研究においては、進路指導主事、部主事、担任を中心に実践を進めたが、進路指導主事が担任に取組を依頼し、結果を報告してもらう方法での研究を行ったため、全体での情報共有の時間を確保できなかった。

3 成果

成果としては、2点考えられる。

1点目は、「自立活動」や「じぶん発見シート」など、自分の性格や特性について考える時間を複数回確保することで、自己理解が深まり、必要な配慮を把握することができたことである。このことをきっかけに、自分の特性に応じた主体的な進路選択を行うことができた。ある担任からは、「じぶん発見シート」の活用は、「生徒自身が自己理解を行うための時間を確保できると同時に、担任も生徒について深く考える時間をもてる」との感想があった。また別の担任からは、「じぶん発見シート」は、「生徒理解の観点での応用が期待される」と評価する感想もあった。学校全体として、「じぶん発見シー

ト」を活用するシステムの構築をしていくことで、生徒自身の自己理解を深めるだけでなく、教員にとっても生徒理解につながり、さまざまな支援に活用できる可能性が示唆された。

2点目は、自分の特性を他者に伝えることを意識した文章を書く取組を通し、自身が必要とする配慮について多面的に捉えられるようになり、進学後に自ら支援を求める必要性についての理解が深まったことである。また、結果として自分のことを説明するための表現の幅が広がることにもつながった。サポートブックが実際に大学での支援に役立てられている事例から、①自分の障害について、②必要とする配慮について、の2点を自分の中で明確化することが、卒業後のスムーズな移行に関連していると考えられる。

4 課題と方策

課題としては、4点考えられる。

(1) 「じぶん発見シート」の活用

今回の研究では、「じぶん発見シート」を活用した実践を行ったが、クラスによって活用に差が見られたことが課題である。シートのより効果的な活用のために、振り返りの機会の設定時期、実施目的など、活用方法を明確化した上で、事前に担任へ周知を行うことで、生徒自身のみならず、担任や、支援に関わる教員にとってもより有益な情報が得られたことが考えられる。そこで、「じぶん発見シート」をキャリアパスポートに付記して実施することと、担任による評価及び生徒自身の評価とのすり合わせの時間の確保の2点を担任に依頼することを計画している。

(2) 進路先の選択における学校の関わり方

大府東高校とのペアでの取組から、進路に関する体験の振り返りの充実を図ることがより効果的であると分かった。そこで、オープンキャンパス後の参加報告書を作成し、進路情報の蓄積及び提供を行うことを計画している。

(3) 校内支援体制の構築

想定よりも狭い範囲での実践になり、教科担当など、担任以外の教員が三つの取組へ介入する場面がほぼ見られなかった。学校全体として、基調提案にあった高めたい資質・能力をキャリア教育に位置付け、推進するための方策も検討が必要である。そこで、キャリア教育の全体計画を作成し、その中で高めたい資質・能力を明記することで周知を図りたいと考えている。

(4) 進路先への移行

本研究では、サポートブックの作成をメインに行い、サポートブックが、進学先で活用できることが推察された。今回は、生徒自身がサポートブックを活用する機会がなかったが、本来は、生徒がサポートブックを活用して、自ら支援を求められるようになることが望ましい姿である。そこで、サポートブックを活用し、困ったときに自分から相談する力の育成を図るための方策として、ロールプレイングを実施し、必要な場面で配慮を求める練習を重ねることで、よりスムーズな移行へつなげていきたい。また、「相談する」という行為には、さまざまな人との人間関係を形成し、自ら「相談する相手」を見つける必要があるが、特別な支援を必要とする生徒にとって「人間関係の形成」が困難な場合が多く、「相談する」ための障壁は高い。最終的に「相談する」力が習得できるよう、人間関係の形成に関わるコミュニケーション能力やソーシャルスキルの育成を、普段の学校生活全体で取り組んでいきたい。

今後は、4点の課題を踏まえ、自己理解を深め、主体的な進路選択を行い、自身の能力や特性を正確に表現し伝えるための一連の流れを系統立てて整理し、より効果的な方策について検討していきたい。

高等部本科第2学年進路希望調査票

1 進路希望

() 専攻科進学

学校名		学科	
-----	--	----	--

() 大学・短大・専門学校等進学

学校名		学部・学科	
-----	--	-------	--

() 就職

業種・職種		企業名	
-------	--	-----	--

(業種・職種) 製造業 サービス業 事務職 販売職 その他

() 福祉的就労

--

2 志望理由

--

3 その他(進路に対するご要望等ありましたらご記入ください)

--

上記のとおり進路希望調査票を提出いたします。

高等部本科第2学年 _____ 科 生徒氏名 _____

保護者氏名 _____

自己紹介書

令和 年 月作成

学 校 名	愛知県立名古屋聾学校		学 年 学 科	高等部本科 第2学年		科	
ふりがな						性別	男・女
氏 名							
生 年 月 日	平成	年	月生	(満		歳)	
住 所							※市、区まで
校 長 名			担当教員				
学校所在地							
障害の状況							
身体状況	身 長	cm	サイズ	S M L LL	靴のサイズ	cm	
自己PR							
① 性格・趣味について							
②コミュニケーション（聞こえ方・伝え方）について							
③学習について							
④実習・作業について							
⑤その他 〈部活動〉 〈主な資格〉							
現場実習への意気込み							
.....							
.....							
.....							

愛知県立名古屋聾学校

サポートブック

— 主に聴覚障害のある生徒を対象に —



氏 名 _____

聴覚障害について御理解いただきたいこと

聴覚障害とは、聞こえの能力が低下している状態のことです。聞こえる音が小さくなってしまったり、音がゆがんで聞こえたりします。

また、聞こえの状態はそれぞれ違います。補聴器や人工内耳を装着していても、はっきり音声がかんたんに聞こえて理解できているとは限りません。音声だけでは理解が困難な場合が多いとお考えください。本人と接する際には、以下のことを参考に御配慮いただけると幸いです。

〈聴力の程度のめやす〉

平均聴力レベル	聞き取りの不自由度	生活音の例
50～70 dB未満	大きめの声や、近くの車のエンジン音などを聞き取れる場合がある。	普通の会話～大声の会話
70～90 dB未満	工場などの機械音などは聞き取れる場合がある。	騒がしい場、蝉の鳴き声
90 dB以上	耳元で大声で話しても聞き取れない。日常音はほとんど聞こえない。	叫び声、走行中の電車内の騒音

〈生徒への対応で御配慮いただきたいこと〉

- ・肩をたたくなどして話者に注目させてから、ややゆっくりと大きな声で話してください。
- ・話して伝えても本人が十分理解していないような様子の時は、簡単な筆談で伝えてください。
- ・複数の人が話しかける場合は、一人ずつ順番に話しかけてください。
- ・本人の発音が分かりにくい場合には、再度言うよう指示するか、書くよう指示してください。
- ・作業内容を指示する場合、まず「実際にやってみせる」ことが一番効果的な方法です。その後、ポイントを簡潔に伝え、本人が「一人で行う」、十分でないときは、「一緒に行ってみる」、また「一人で行う」、その繰り返しをお願いします。
- ・会議や朝礼など大人数が集まり話を聞く場合は、事前に内容を資料等で示していただけると伝わりやすくなります。また、話者の様子やスライドなどが見やすいよう最前列にするなどのご配慮をお願いします。

生徒個人票

記入日 令和 年 月 日

① 基本情報

ふりがな		性別	男・女	年齢	歳
氏名		生年月日	平成 年 月 日		
学年	高等部 科 第 学年 科				
住所	〒 -				
連絡先 (学校)	〒464-0021 愛知県名古屋市千種区鹿子殿 21-1 愛知県立名古屋聾学校 電話番号：(052) 762-6846 (担任)				

② 聴覚障害の程度及びその他の障害

障害名					
手帳名	(有 無)	手帳	等級	種	級
聴カレベル	右： dB (補聴器 人工内耳 無) 左： dB (補聴器 人工内耳 無)				
その他の障害					

③ 生徒の実態

性 格	
興味・関心のあること	
自己アピール	

聞くことについて	
話すことについて	
読むことについて	
書くことについて	
コミュニケーション手段について	
学校での具体的な支援	
お願いしたい支援内容	